ひょうご人権ジャーナル

ひろげよう こころのネットワーク

きずな

KIZUNA

2016
平成28年
2

特集テーマ

まなびと人権

まなびからはじまる

2 のじぎく文芸賞 詩部門 最優秀賞「ゆうくん、とうくん」
山本季枝さん

3 「『絶対的自尊感情』という至宝」
園田雅春さん（大阪成蹊大学教育学部 教授）

4 「『あたりまえ』の反対はなんだろう」
山崎清治さん（NPO法人生涯学習サポート兵庫 理事長）

5 「ラグビーから学ぶ人権」
吉川康夫さん（帝塚山学院大学人間科学部 教授）

6 「犯罪被害者の置かれた現状と適切な対応」
長井 進さん（常磐大学大学院被害者学研究科長（教授）・常磐大学国際被害者学研究所長）

7 ふれあいサロン

8 情報ぷらざ

兵庫県マスコット はばタン

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

のじぎく文芸賞 詩部門 最優秀賞

山本（やまもと） 季枝（としえ）さん

「ゆうくん、とうくん」

ゆうくんは、踊るように、真っ直ぐにドンドン。地球を蹴る。大きい声で、歌いながら。大好きなお父さんに見てもらいたくて。ゆうくんにしたら、地球は大きなサッカーボールだね。お母さんは、サッカーボールと一緒に飛んで行ってしまいそう。

とうくんは、魂を大音量で地球いっぱいに響かせる。「思う通りにならないよ」って、いっぱい泣いて、泣いて。とうくんにしたら、この地球は大きくてまあるい舞台だね。お母さんは、舞台から落っこちてしまいそう。

お母さんは、お母さんなのに、あなた達の心がちっともわからないよ。一度、中に入って、あなた達の目から、この地球を感じてみたい。一度、中に入って、あなた達の目から、お母さんである自分を見てみたい。そんなことばかり思いながら、あなた達と過ごしていた。

ゆうくんととうくんはすごい。この頑固なお母さんの、心をこわしてくれた。

そして、ゆうくんととうくんはすごい。心のこわれたお母さんを、そっと、育んでくれている。「お母さん」じゃなくても、「お姉さん」でも、「あかちゃんの妹」でも。もう何でもいいよって、育んでくれている。

「大好きだよ」って、育んでくれている。

のじぎく文芸賞作品集講評より

ふたりの兄弟。性格は対照的。ゆうくんは活発で地球をサッカーボールにして蹴らんばかりの元気もの。とうくんは自分の気持ちを声に出して、泣くときも地球を舞台にして力いっぱい泣く。子育てはたいへん。ふたりに振り回されて、子どもたちの心がちっともわからない。不安になる。「心のこわれたお母さん」という表現は実感だろう。しかし、そういう子育ての悩みやつらさも子どもたちが解決してくれた。≪ゆうくん、とうくん≫対≪お母さん≫の対決という子育てだったのが、「『お母さん』という殻を脱いでいいんだよ」ということを子どもたちから教えられたのだ。「頑固に」「お母さん」であろうとしていた自分に、「『お姉さん』でも」「なんでもいいいよ」ということを教えられたのだ。

子育ての難しさや当惑の中から、やわらかで、ナイーブな子どもの気持ちに気づいていった母親の素直な心の移りゆきやよろこびが十分に表現されている。

詩人・のじぎく文芸賞審査委員　時里二郎

人権を尊重する態度や行動が文化として定着した社会づくりを進めるためには、人権に関するまなびの機会を持つことが大切です。家庭や学校、地域、職場でのまなびの機会をより充実させ、自分も他人も大切にできる人権感覚を育んでいきましょう。

「絶対的自尊感情」という至宝

大阪成蹊大学教育学部 教授
園田 雅春さん

「子どものよい所を探してほめましょう」

教育や保育の現場では、この方向でしきりに取り組まれています。それは決して悪いことではありません。子どものあら探しをして責め立てるより、うんとよいことです。

「子どもの悪い点ばかりをあげつらっていると、そうなってほしくないような人間になってしまう」

心理学者のデニス・ウェイトリーが唱える通りだと思います。

これまで子どもの教育やしつけは、どちらかというと弱点に眼を向けて「あなたはここがダメだ」「この点がまだまだ弱い」という、いわば『ひき算の教育』が主流だったのです。

ところが、欧米では『たし算の教育』に軸足が置かれ、20世紀後半には「あなたのよい所を5つ書いてきなさい」という宿題が、小学一年生の定番でさえありました。

よい所探しの「落とし穴」

しかし、よい所を探してほめることに「落とし穴」があるのをわすれてはなりません。

「その子のよい所」は、しばしば周囲との比較から見出されるため、状況や環境が変われば、よい所だったはずのものが、そうではなくなってしまう局面に遭遇します。

出るところに出れば「上には上がいる……」という絶望感や挫折感。そして、ポキッと音を立てて、折れてしまう自尊感情。そこから立ち上がる復元力のない自尊感情。これは「相対的自尊感情」というべき不安定なものです。

そうではなく、揺るぎない自尊感情。つまり「絶対的自尊感情」というものに、もっと着目すべきだと思います。相対的で状況的な「よい所」というお宝探しに明け暮れるのではなく、ありのままの子どもの存在そのものが、掛けがえのないお宝だという認識です。

「いま、ここに居るあなたが限りなく大切」

このまなざしを通じて、子どもの中に育まれていく感情。それが「絶対的自尊感情」です。これは『ドラえもん』シリーズの*「のび太の結婚前夜」にも具現化されているところです。

特に「絶対的自尊感情」は、乳児期から始まる子ども時代にたっぷり育まれることが重要なのです。この自尊感情は身近な他者を通じて送り届けられる至宝。車でいえば「高級ガソリン」に匹敵します。

安定した自尊感情は、自分同様に相手も大切にしようとする人権感覚、さらには学習意欲の源泉です。まずは私たちおとながこの自尊感情をどう育み合い、そして子どもの自尊感情を育む「よき給油人」として、いかに立ち会うのか。いま、そこが問われています。

プロフィール

1948(昭和23)年、京都市生まれ。小学校教員の後、甲子園短期大学教授、大阪教育大学教授・同大学附属平野小学校長を歴任。現在、大阪府教育コミュニティづくり推進協議会委員、滋賀県人権教育推進会議委員など。教育研究、講演・執筆と多忙な日々だが、子ども主義・現場主義にこだわるのが信条。著書『自尊感情を高める学級づくりと授業』など多数。

＊(注)藤子・F・不二雄の漫画作品『ドラえもん』第25巻(小学館)や同アニメ作品の中に描かれた一話。
しずかちゃんが結婚前夜、両親に「私は何もしてあげられなかった…」と謝意を伝えます。すると、父親は「きみが生まれてきてくれたこと、それ自体すばらしい贈り物だ」と存在そのものに対する価値をゆっくり語り始めるのです。ぜひ作品を直に味わってもらいたいと思います。

「あたりまえ」の反対はなんだろう

NPO法人生涯学習サポート兵庫 理事長
山崎（やまさき） 清治（せいじ）さん

無人島自給自足生活の本当の目的

私は毎年、夏になると無人島で子どもたちと一週間生活します。電気も水道もない島に、水と米と調味料だけもって行くわけです。魚を捕まえ、鶏を飼い、全ての食事を仲間と自炊するわけですから、それだけを聞くとサバイバル体験ですが。でも、このプログラムの目的は、実はサバイバルではありません。子どもたちに「ありがとう」の言葉の意味と深さを感じ取って欲しいのです。

「ありがとう」の反対語は「あたりまえ」。私はそう考えています。つまり、子どもたちに気持ちの込もったありがとうを言ってもらえるように、全てのあたりまえを取り除いた結果、無人島でのプログラムに行き着いたのです。「ありがとう」を心から言える子は、感謝の気持ちを感じ伝えることが出来るのは当然のこと、その行為や言葉の貴重さに気づいているので、逆に人に対して思いやりの感情を抱くことも、自分から行動することも出来ます。ですので、ありがとうを言う能力はまさに今話題の「生きる力」のバロメーターだとも言えます。

ちなみに、周囲のお子さんがありがとうを心から言えているのかを知るには、子どもたちをよく観察すればわかります。心から言えている子はありがとうの口調が時と場合に応じて全て違います。心から言えていない子はいつも、全ておなじ口調です。

無人島生活は、現代社会の縮図

ありがとうを言ってもらえないと、自分が役に立っていないと感じてしまいます。役割がないということは言い換えれば居場所がないということです。ありがとうを言われないとき、自分の無力さに気づき、役割を見つけようとして様々なことに挑戦しようとすることで、子どもたちは成長していきます。見つからない間はたった数日間の無人島生活中ですらテントの中にひきこもってしまい、周囲とコミュニケーションをとろうとしない期間が生まれます。いわば無人島でも、今の日本の若者の社会問題と同じ事が起きるのです。

「あたりまえ」を減らしてみよう

あたりまえをひとつ失くすと、ありがとうがひとつ生まれます。子どもたちの間でのありがとうが減り、自己有用感が低くなりつつあるのは、私たちがあたりまえを増やしてしまっているからではないでしょうか。便利な道具やサービスはもちろんのこと、子どもへの関わり方にも潜んでいます。指示の出しすぎ、係の決めすぎ、ルールでの縛りすぎ、くじ引き、じゃんけん、男女や年齢などの先入観…。考えてみれば忙しさのあまり、あたりまえをどんどん作りだしていることに思い当たります。

無人島には行かないまでも、ひとつずつ、あたりまえを減らしてみる。それだけで、ありがとうという言葉は、言葉が生む心地よさだけではなく、子どもたちの生きる力をひとつずつ育むような気がします。

無人島プログラムの一コマ。自給自足を通して仲間とともに成長する子どもたち。

プロフィール

1972（昭和47）年、大阪府生まれ。長年にわたり青少年を対象に、兵庫県リアカー縦断プログラムや無人島一週間自給自足プログラムなどの教育プログラムをプロデュース。そこで関わる若者の社会力低下にも着目し、社会力育成プログラムにも従事している。その他、子どもの人権、生きる力についての講演も全国で展開。武庫川女子大学他多くの大学で教鞭をとる。

ラグビーから学ぶ人権

帝塚山学院大学人間科学部 教授
吉川 康夫（よしかわ やすお）さん

初めに

昨秋のスポーツ界はラグビーワールドカップで盛り上がりました。ラグビーはマイナースポーツ化して久しかっただけに、この盛り上がりは長年のラグビーファンには望外の喜びでした。

ところで、かつてラグビーを経験した人々にはこの球技を特別視する傾向があって、その素晴らしさを熱く語って尽きないことが多いものです。筆者もその一人だとお断りした上で、ここではこの球技に絡んで言及されることの多い二つの言葉から、筆者がこのスポーツから学んだことを紹介したいと思います。

ノーサイドの精神

一つはラグビーでは試合終了をノーサイドと言って、どんなに激しく闘い合っても、試合が終われば、敵と味方という互いのサイドを無効にし、健闘を称え合おうとします。試合が終われば一列に並んで手を軽く振りながら何か言っているシーンが見られますが、あれはまずキャプテンが相手チームの健闘を称える言葉を言い、それに合わせて全員が唱和しているのです。幾ら大勝しても、それで相手を見下すのでは、そんなチームは不細工なだけです。勝利は嬉しいし、敗戦は悔しいものです。でも、まずは相手チームを尊重し、敬意を表します。それは人間関係や社会生活の基本でもあるでしょう。

one for all, all for one（一人はみんなのために、みんなは一人のために）

これもラグビー精神を表す言葉として知られています。ラグビーにはそのポジションによってかなり体型の異なるプレーヤーたちがいます。ずんぐりむっくりした屈強な力持ちタイプや背が高くて大柄なタイプから、小柄でちょこまかと動くタイプ、すらりとした俊足タイプなど様々です。そしてそうした多様な人間がその各々の個性を充分に発揮しつつ、みんなのために頑張り、みんなはトライへ向かう一人のために尽くすことになります。トライを決めるプレーヤーは格好いいのですが、一つのトライの裏にはスクラムに堪えたフォワードや、パスを繋いでくれたバックスの一人一人の支えがあり、それを決して忘れてはならないという戒めです(だから、五郎丸歩選手が余りにも取り上げられすぎると、ラグビーファンはちょっぴり抵抗を感じたりもするのです)。それは、最近よく言われる「ダイバーシティ(多様性)」の尊重でもあります。

ラグビーから学ぶ人権

これらの言葉は民主主義社会の基本精神を表すものとも考えられます。まず他者への思いやり。そして一人一人が、自分さえよければいいと考えるのではなく、他のみんなのために力を尽くそうとし、他のみんなも、社会を構成している一人一人のために尽くすという考え方だからです。特に大事なのは後半のall for oneです。一人一人のあり方を大切に尊重し、その個性が発揮されて輝くことを願う、まして決してないがしろにしたり切り捨てたりしない――それこそが人権意識の基本でしょう。筆者はそういう基本をラグビーから学んだと思っています。

プロフィール

1949(昭和24)年大阪府生まれ。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。帝塚山学院短期大学助教授を経て現職。ニーチェ哲学を中心にニヒリズムの諸問題を研究し、ニヒリズムを生み出していく近代的世界観の吟味検証を試みている。この世界観の下に形成された近代スポーツも吟味の対象の一つ。共著に『スポーツ・ジェンダー学への招待』(明石書店)、訳書にA・ホール『フェミニズム・スポーツ・身体』(世界思想社)等がある。

犯罪被害者の置かれた現状と適切な対応

きずなトピック

常磐大学大学院
被害者学研究科長（教授）・
常磐大学国際被害者学研究所長
長井（ながい） 進（すすむ）さん

犯罪被害者の置かれた現状

犯罪、特に凶悪な犯罪は被害者の主権に対する極端な侵害で、同時に被害者の心に傷を植えつけます。被害者は圧倒的な無力感と孤立感を経験させられます。人間社会全体に対する深い不信感も植えつけられてしまいます。生きる意味を失い、さらにその気力さえ奪われてしまいます。

精神的被害からの回復過程はきわめて複雑です。加害者の悪意と暴力によって絶望の淵に突き落とされたにもかかわらず、だれかがそこから引き揚げてくれるわけではありません。被害者が主体的に取り組み、這い上がろうと努力しなければ、精神的被害回復は望めません。しかも、被害者がいくら回復に向かおうとしても、原状を回復することは不可能な場合が多々あります。被害者にとって、現実はあまりに理不尽で、過酷なのです。

犯罪被害を想起する際、被害後に経験した多様な二次被害のエピソードもほぼ同時に想起されます。それが、被害回復過程を複雑化させ、長期化させる要因のひとつです。したがって、二次被害を減らすことが肝要です。

被害者への配慮と接し方

被害者支援とは何を指して言うのでしょうか。被害者の無力感と孤立無援感によるストレスを緩和し、本人の自発性や主体性の回復に役立つ、周囲の他者からの活動はすべて支援と呼べるでしょう。被害者の観点からすれば、「自分には自分で判断し、自分で意思決定する力がある」という感覚と、「自分にとって大切な人々との間に信頼の絆がある」という感覚を取り戻すのに役立つことが支援です。「確かに多くの人々から支援を受けてきたが、私は過酷な現実と多くの問題に主体的に取り組み、努力してきたからこそ今の私がある」という認識と記憶を被害者が抱くことができるように、周囲の私たちが配慮し工夫することが大切です。

被害者を理解することがすべての始まりです。一般に、いつも通りに接していただくことが望ましいと思います。

関わる人の誠実で、穏やかで、丁寧な態度は被害者に伝わります。多くの言葉は必ずしも要りません。他者の痛みが分かること、状況を察知できることは、被害者への理解と支援につながります。しかし、関わる人の善意は、被害者がそれを実感できるときにのみ、「善意」と理解されるということを忘れないでください。

被害者等による街頭でのビラ配りのビラを受け取ること、署名運動を協力することは立派な支援です。新たな被害者を被害者支援センター等に紹介するのも立派な支援です。

プロフィール

1949（昭和24）年、大阪府生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻修士課程修了。専門は、臨床心理学、被害者学。学外では、公益社団法人いばらき被害者支援センター理事（研修担当）、第三管区海上保安本部惨事ストレス・心の健康対策ネットワーク委員会委員長を務める。

新着図書紹介

ふむふむ おしえて、お仕事！

著者　三浦 しをん
発行所　新潮社

ビール職人、靴職人、染織家、動物園の飼育など、特殊能力と情熱を持って仕事をしている16人の女性へのインタビュー集です。聞き手は、作家の三浦しをんさん。〝ふむふむ〟と相槌を打ちながら、軽妙な語り口で、その職業やその人自身の魅力を引き出していきます。

取り上げられた仕事は、その内実を想像しにくいものばかりで、興味をそそられます。男社会であった建設会社の現場監督になった女性の苦悩と成功、活版技師が感じるやりがい、「その専攻でなぜその仕事？」と疑問が生じる人も。それぞれの人生が垣間見えます。文庫本には、インタビューから数年後の様子も記載されていておもしろい。

「天職だろうとそうじゃなかろうと、とにかく自由な気持ちで苦しんだり楽しんだりしながら仕事していければいいな」と三浦さん。ユーモアあふれる文章とあいまって、思わず引き込まれる一冊です。

ふれあいサロン

読者からのお便り

さまざまな障害を「害」と考えずに、個性と考える取り組みが広がっています。顔や性格が一人ひとり違うように、いろいろな人がいると考え、その人との絆を深められる世の中になればいいなぁと思います。今月号の「実践に役立つ発達障害の知識」も正しい知識を得るのに大変役立ちました。

(神崎郡・クマのヨッチャン)

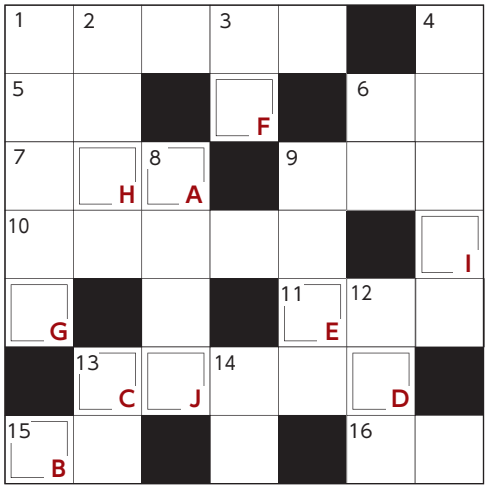
誰もが安心して暮らせる社会に、法律の支えも必要だと実感する12月号でした。

(神戸市・小林俊彦さん)

12月号の新着図書紹介にあった福島智さんは、障害があるにもかかわらずコミュニケーションの手段を取り戻し、常勤の大学教授をされていることにとても感動しました。

(神戸市・井上隆史さん)

問 A～Jの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう？



たてのカギ

1. 節分の翌日。暦の上ではもう春です
2. 線路上の雪を取り除きながら走る○○○○車
3. 瀬戸内海沿岸部の特産品として知られるイカナゴの○○煮
4. 他の人の体験する感情を自分のもののように感じ取ること
6. 自分自身。「○○流」
8. ぜひ見つけてほしい、生きていることを喜びと感じられる事柄
9. てんぷらとして食されることが多い、春の代表的な山菜
12. 連なり関わりあって続くこと。「○○○反応」
13. 自分の兄弟姉妹の子どものうち、女の子は○○
14. 人の悪夢を食うとされる想像上の動物

よこのカギ

1. 緊張をほぐしてゆったりとくつろぐこと
5. 卒業証書や感謝状はこれに入れて持ち帰ります
6. 相撲の番付にある「○○の口」「○○二段」
7. 物事に対する構え。問題に取り組む○○○が大事ですね
9. 良いことがいっぱいあること。「御○○○をお祈りします」
10. 地方自治体のキャンペーンなどで大人気です
11. 老舗が誇りをもって大切に守っているもの
13. 映画などを見ていて感動の涙を流すのは、このシーンです
15. 社会集団における立場。「高い○○につく」
16. オレオレ○○、振り込め○○にはくれぐれもご用心！

12月号の答え ヒ ツ ジ カ ラ サ ル ヘ

投稿&クロスワードで「オリジナルカードケース」をプレゼント！

「読者からのお便り」の投稿掲載者(平成28年4月号)とクロスワードの正解者(抽選で10名)に、「オリジナルカードケース」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。

※投稿はペンネームの使用も可能です。※当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。

応募方法 締め切り はがきか、ＦＡＸ、メールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前(ペンネームを使用の場合も要併記)、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。3月4日(金)締め切り(必着)

応募先 〒650－0003 神戸市中央区山本通4丁目22番15号 県立のじぎく会館内
(公財)兵庫県人権啓発協会　「きずな」ふれあいサロン係
TEL:078(242)5355　FAX:078(242)5360　Eメール:info@hyogo-jinken.or.jp
＊応募者および投稿者の個人情報は、管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。

平成27年度

「人権のつどい」を開催

昨年12月2日(水)に平成27年度「人権のつどい」を開催しました。この行事は「人権文化をすすめる県民運動」を一層推進するために毎年行っているものです。この日、兵庫県公館に約450人が集い、人権について考えました。

「のじぎく文芸賞」の表彰式に始まり、シンガーソングライターの石田裕之さんによる「ハートフル人権コンサート」では、優しい歌声が会場に響きました。講演では、社会福祉法人恩賜財団済生会理事長で、ソーシャルファームジャパン理事長の炭谷茂さんが、総務庁地域改善対策室長(当時)としてのご経験等を交え「人権文化あふれる社会の実現のために～同和対策審議会答申から50年～」と題して講演されました。

石田さんは、「やっぺす♡石巻」など6曲を披露。弾き語りとともに、映像を交えながら被災地支援やバングラデシュの貧しい村の子どもたちの教育支援の様子をお伝えいただきました。

炭谷さんは、同和対策の歩みや現状を分かりやすく解説したのち、ソーシャルインクルージョンの理念を定着させ、地域特性を生かしたこれからのまちづくりについて説明されました。

イベントガイド

たつの市 人権を考える市民の集い(揖保川会場)	日時 2月6日(土)13:30～16:15 場所 アクアホール ※JR山陽本線「竜野」駅から徒歩約10分 ・「私の心にひびいたあの一言」優秀作品発表・表彰 ・人権啓発劇「ちょっと考えてみませんか?」11　ライフデザインいぼがわ ・記念講演会 演題「夢見る力を信じて～ともに生きる未来へ～」 ●講師　前川裕美 さん(音楽家)	問い合わせ たつの市教育委員会 人権教育推進課 TEL 0791(64)3182
加東市 人権を考える市民のつどい	日時 2月13日(土)13:30～ 場所 東条文化会館 ※中国自動車道東条インターチェンジから車で約5分 ・市内中学生(4名)による人権作文の発表 ・人権学習実践発表(3団体:学校と地域と企業の取組み) ・人権劇「5人の迷える男たち」　乾劇団	問い合わせ 加東市教育委員会 人権教育課 TEL 0795(43)0544
加古川市 ふれあいフェスティバル	日時 2月20日(土)14:00～16:10 場所 加古川市民会館中ホール ※JR「加古川」駅から神姫バス「市役所前」下車すぐ 映画上映「手紙」(原作:東野圭吾さん)	問い合わせ 加古川市人権施策推進課 教育・研修係 TEL 079(451)5029

インターネットで「人権文化をすすめる県民運動」の模様を配信中!　人権文化をすすめる　動画　検索

優秀作品

ふだんから　何でも言える　心地よさ

(豊岡市　大月祐三さん)

人権に関する川柳を募集します!

いずれかのテーマに当てはまる川柳を募集します。
優秀作品は「きずな」に掲載し、オリジナルクリアファイルをプレゼント。

募集テーマ　いのち、人権一般、子ども

応募方法　はがきか、FAX、メールで受け付け。
郵便番号、住所、名前(ペンネームの場合も併記)、年齢を明記のうえ、ご応募ください。3月4日(金)締め切り。(応募は各テーマにつきお1人1点とします。)

インターネット上を含む未発表・未投稿の自作の作品に限ります。

応募先　(公財)兵庫県人権啓発協会　啓発・研究部(下記参照)

ハーフタイム half time

編集を通して、学校、スポーツ、遊びなど生活のあらゆる場面が、人権を「まなぶ」場になることを感じました。

寄稿いただいた生涯学習サポート兵庫の山崎さんから、大学で担当する授業の様子を教えていただきました。「あそびゴコロ」と「笑い」を切り口に、体験を取り入れた授業はとても楽しそう。この授業で一番身につけさせたい力は「コミュニケーション力」だと山崎さんは言います。

コミュニケーションは相手との双方向で成り立つもの。相手のことを考えることが大切で、その基盤になるものは人権感覚だと思います。

人と関わりあって生きていく私たちだからこそ、人とのふれあいや体験を通じて人権感覚を磨くことが大切なのだと思いました。　(小池)

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp
兵庫県人権啓発協会　検索

2016(平成28)年2月発行